

総評

河北新報社常務取締役 鈴木素雄

現場知を育む

中学生、恐るべし！ そう感心させられる洋画がこの夏、公開されました。世界23カ国で翻訳され、ベストセラーにもなったノンフィクション『風をつかまえた少年』。文部科学省選定映画であり、先生の勧めで鑑賞した生徒さんがいるかもしれません。

舞台は2001年、アフリカの最貧国マラウイ。大千ばつが襲い、14歳の少年が住む村も食糧危機に見舞われます。少年は授業料が払えず退学処分となつてしましますが、学校図書館に忍び込み（？）独学で風力発電の仕組みを学びます。少年の試みに最愛の父でさえ無視を決め込みますが、最終的には仲間と協力して風車を創作、井戸から水をくみ上げ乾いた畑を潤すことに成功するのです。

点滴石てんていしをうがつ。家族を、地域を救いたいという少年の粘り強さと情熱に心を打たれます。ですが、私はこの実話から「学ぶ」という行為の本来の在り方や自由な発想の大切さ、試行錯誤の面白さなどを教わった気がしました。

どういふことか。日本では学習の目標が往々にして教科書を字義通りに理解、または暗記することに重きが置かれがちです。九九をマスターする、漢字の読み書きを頭にたたき込む。確かに「覚える」ことは学びの第一歩です。ですが、風をつかまえた少年は課題そのものを自分で発見し、五感を総動員して解決に導きます。自ら考え行動するバイタリティーこそが学びの真骨頂であり、成長の証しなのです。

「私の挑戦」・「私の成長」を基本テーマに、新潟を含む東北7県から1万7568編の作品が寄せられた東北電力第45回中学生作文コンクール。審査に当たって重視したのは目標に向けて真つ向勝負する熱量と、それとは裏腹に冷静に自己分析し課題に挑戦するしなやかさの二点でした。

最優秀賞に輝いた郡山市立小原田中2年生 祐成さんの「機械いじり」はバイクのエンジン分解という難事業を生き生きと、しかもユーモラスに描いた作

品でした。インターネットで予備知識は仕入れてあったのですが、いざ実行に移してみると思い通りにはいきません。そこで、星さんは経験の大事さに気がきます。職人の知恵とでも言うべきものです。風をつかまえた少年同様、現場での創意工夫こそが成功への道を切り開くのです。

皆さんは輸送用機器メーカー・ホンダ創業者の本田宗一郎さんを知っていますか。晩年までツナギを着て工場の一線に立ち、若手を指導しました。生前の口癖は「やってみませんか、何がわかる？」。星さんが未来の本田宗一郎たらんことを願つてやみません。

「好きこそものの上手なれ」を地で行く星さんと対照的だったのが、優秀賞を受賞した弘前市立北辰中2年齊藤 栖佳さんの『ダブルSの人生』。相撲と吹奏楽の二刀流部活を実践中ですが、嫌いなはずの相撲の方の成績がなぜか良く、周囲の期待値も高い。本人の困惑ぶりが伝わる筆致が何ともほほ笑ましかったです。謎解きめいたタイトルやしやれた比喻も効いています。

岡目八目おかめはちもくと言います。第三者の方が当事者よりも情勢を客観的に判断できることを指します。挑戦や成長に他人の目を入れてみるのも大事かもしれません。同じく優秀賞を受賞した横手市立横手明峰中2年今仲 野乃佳さんの『伝統のバトン』は、地域の伝統芸能を承継する責任の重さと苦しさがよく書けていました。中2とは思えない的確な言葉遣いを高く評価します。

想像以上に過酷な舞姫の所作。見るのとやるのとでは大違いです。舞の稽古にまつわる記述は大人顔負けの身体論になっていました。ここでも現場の知を養う重要性を指摘することができます。

最後に作文の有用性について触れておきます。私たちは言葉で物事を考えた時、人とコミュニケーションを取ったりします。言葉が曖昧だったり不完全だったりすると、自分という存在は宙に浮いたままです。言葉が紡ぎ、書くという行為は自己を確かなものにする作業です。指先でちよちよいとスマホをタップするのは違った「面倒くささ」こそが、あなたを確実に成長させてくれるはず。